

●グローバル化時代の医療・検査事情

元・大使館付医務官の独り言
第七話「シリアで内戦に巻き込まれる」の巻よし だ さだ のぶ
吉 田 定 信
Sadanobu YOSHIDA

「もう日本に帰った方がいい」と主治医は言った。ペルーに在勤して3年が過ぎた2006年5月、筆者は6カ所目の任地である中東シリアの首都ダマスカスに転勤した。あのシリアである。筆者はこの後一旦帰国を挟んで二度目のシリア勤務を経験することになるのだが、内戦の憂き目に遭うことを、このときはまだ予感すらしていない。

あの頃のシリアは平和だった。少なくとも筆者の目にはそう見えた。街角ですれ違う若者たちに「ハロー」と声をかけると、「ウェルカム！」と返ってくる。そんな国だった。2007年4月には北京オリンピックのサッカーアジア地区二次予選で日本代表チームがダマスカスに、翌2008年9月にはAFCチャンピオンズリーグ戦でガンバ大阪がホームに来るなど、それほど平和だった。今では銃撃戦の様子が映し出されるホームスだが、そのときは完全アウェイにも関わらず、ラマダン中で人心が荒れる時期の試合だったにも関わらず、その上ガンバ大阪が勝ったにも関わらず、われわれ日本人サポーターに危害が及ぶようなことはなかった。前年の五輪予選でもわれわれ大使館員は有給休暇を取って応援に駆けつけたが(写真1)、筆者には別の役割もあった。すなわち日本代表選手団のチームドクターに協力して、選手たちの不測の事態に備えるため、現地医療機関との調整やスタジアムへの救急車の配備などを支援していたのである¹⁾。こういうときこそ、日頃の人脈に助けられる。チームドクターによると、代表選手はJリーグから預かっているのだから、健康管理にはとても気を使うそうだ。幸い何事もなく、日本代表チームは勝って日本へ帰って行った。こうして、一度目のシリア勤務は穏やかに過ぎていった。



写真1 サッカー北京五輪予選で同僚らとともに日本代表チームを応援(右から2人目、日の丸を持つ筆者、2007年)

平和なときしか現地視察はできないということを経験したので、シリアでは積極的に視察に出向いた。今では戦場となっているシリア第二の都市アレppoをはじめ、領有権を巡って長年イスラエルとにらみ合いを続けているゴラン高原にも行く機会があった。ゴラン高原のシリア側とイスラエル側に展開する国連兵力引き離し監視隊(UNDOF)に、当時は日本の自衛隊からもPKO部隊が駐屯していた²⁾。ゴラン高原の麓の町クネイトラでは、完膚なきまで破壊された病院の廃墟を見学した(写真2)。破壊したのはシリアだ、いやイスラエルだ、と互いに非難しているのだが、どちらにしてもその破壊ぶりは常軌を逸している。

さて、筆者は2009年に一旦帰国して厚生労働省成田空港検疫所に勤務することになるのだが、2009年とは、H1N1新型インフルエンザが流行したあの年である。まだシリアにいたとき、日本ではゴール

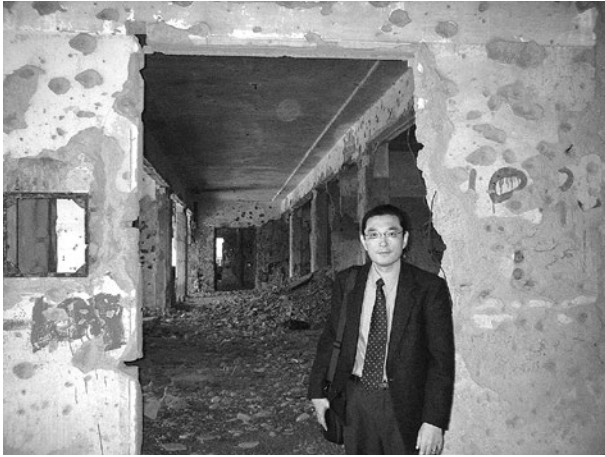


写真2 廃墟と化した病院で(クネイトラ、2007年)

デンウィークに入る直前、WHOが新型インフルエンザの警戒フェーズを上げたとCNNが報じている。しかも、予想されていたH5N1とは異なる型だ。「鳥」に代わって「豚」が攻めてきた」と世情は騒然となる。その後の経過はご存じの通りであるが、人事上の偶然とはいえ、新型インフルエンザの海外発生期における在留邦人支援と、日本国内流行期における水際対策の両方に従事できたことは大変勉強になった。しかし、長年飛行機に乗って仕事をしてきた筆者にとっては、飛行機は見送る物より乗る物である。もう一度海外勤務に就きたい。筆者は意を決して再度外務省を受験し、2011年2月、医務官としてシリアに再赴任したのである。シリアに二度目の赴任をした直後、まだホテルに仮住まいをしていたとき、衛星放送の画面が突如変わった。東日本大震災の発災である。大変なことになった。われわれは、日本から遠く離れたシリアで津波のニュース映像を凝視していた。それから1カ月もたたないうちに、今度はシリアで内戦が始まった。日本の外務省から在留邦人には退避勧告が、大使館員の家族には全員帰国命令が出た。日本からシリアに向けて送ったわが家の引っ越し荷物はまだインド洋の上だ。それから筆者は、日本大使館の道向かいに安アパートを借りて一人暮らしを始めた。大家はとても気のいい男で、「腹が減ったか」と言っただけで自炊が不得手な筆者のためによく差し入れをしてくれた。困ったときの「アラブ飯」は実にうまい。

ダマスカスでは半籠城生活が続いていたが、気力は充実していると自分では思っていた。日本人がいる限り医師として最後まで残るぞと意気揚々として

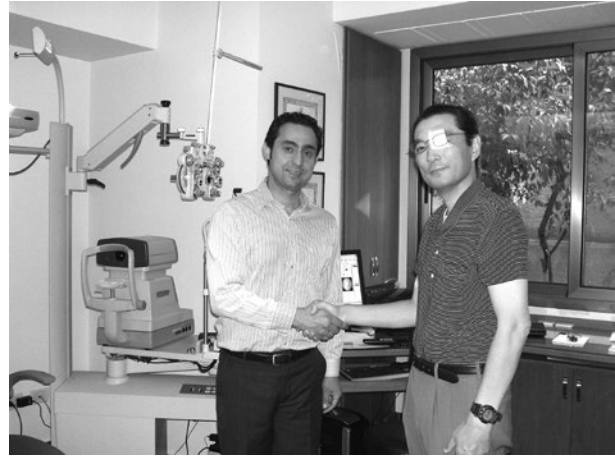


写真3 ダマスカスの眼科開業医と(2011年)

いた、と思っていた。ところが、内戦が始まってから5カ月目の8月、急に左眼が充血し、数日のうちに霧視で覆われ、テレビの画面どころか輪郭も見えなくなった。どうしたんだろう、充血が強いので流行性角結膜炎(EKC)だったらいやだな、疲れが溜まっているのでヘルペスかもしれないな、自分は確か開放隅角のはずだがまさか…と自問自答を繰り返すうちに症状はますます悪化した。たまたま現地の眼科医を受診したところ(写真3)、「残念ながらEKCではない」と、ある病名を告げられたのである。自問自答のうち、鑑別診断が合っていたことに奇妙な満足感を覚えたのは職業病か。こうして良医と出会い通院を続けたが、症状はなかなか改善しない。手に入る点眼薬はシリア製のみ、しかも薬局を3軒回ってやっと手に入るようなありさまだ。内戦は次第に地方都市から首都ダマスカスの郊外に迫る。そのとき主治医が筆者に告知したのが冒頭の言葉だ。とうとうこの眼科医も休診することになり、万事休す。筆者の疾病は想定外のことなので、急に異動できるようなポストもない。無念だ。筆者は帰国を決意した。(つづく)

文 献

- 1) 吉田定信. サッカー北京オリンピック日本代表チームのシリア遠征—現地救急医療体制を支援して. 日本医事新報. 2008; 4383: 78-81
- 2) 吉田定信. グラン高原における国連兵力引き離し監視隊の医療活動. 日本医事新報. 2007; 4332: 85-88

本稿は個人の見解に基づくものです。